

橋本泰元博士 略歴・業績一覽

橋本泰元博士 略歴

一九五三年八月九日 埼玉県 真言宗豊山派童子山養性寺にて生まれる。

学歴

一九七二年三月 埼玉県立春日部高等学校普通科卒業

一九七二年四月 東京外国語大学外国語学部インド・パークスターン語学科（ヒンディー語専攻）入学

一九七六年三月 東京外国語大学外国語学部インド・パークスターン語学科（ヒンディー語専攻）卒業

一九七六年四月 東京外国語大学外国語学部インド・パークスターン語学科（ヒンディー語専攻）教務補佐員

一九七七年四月 東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程アジア第2言語（インド語学）専攻入学

一九七九年三月 東京外国語大学大学院外国語学研究所修士課程アジア第2言語（インド語学）専攻修了

一九八〇年一月 インド国立パナラース・ヒンドゥー大学文学部大学院修士課程にインド政府招聘奨学生として学ぶ（一九八二年六月まで）。

二〇〇五年三月 博士（文学）、東洋大学

教職歴

一九八二年九月―一九九三年三月 拓殖大学政経学部非常勤講師

一九八二年九月―一九九九年十二月 （株）シルクロード文化研究所ヒンディー語講座講師

一九八三年四月―一九八四年七月 外務省研修所ヒンディー語講師

- 一九八三年九月―一九九〇年三月 東海大学文学部文明学科南アジア課程非常勤講師
 一九八三年九月―一九八六年三月 専修学校アジア・アフリカ語学院インド語科非常勤講師
 一九八四年四月―一九九三年三月 亜細亜大学教養部非常勤講師
 一九八六年四月―一九九三年三月 大正大学教養部非常勤講師
 一九八六年四月―一九九三年三月 大東文化大学国際関係学部非常勤講師
 一九九二年四月―一九九四年三月 千葉大学教養部非常勤講師
 一九九三年四月―二〇〇〇年三月 東洋大学文学部印度哲学科助教授
 一九九三年四月―現在 東洋大学附置東洋学研究所研究員
 一九九三年四月―二〇二二年三月 大正大学非常勤講師
 一九九四年四月―一九九六年三月 東京外国語大学外国語学部非常勤講師
 二〇〇〇年四月―二〇〇四年三月 東洋大学文学部印度哲学科教授
 二〇〇一年四月―二〇〇四年三月 東京外国語大学外国語学部非常勤講師
 二〇〇三年四月―二〇〇三年八月 東京大学文学部人文学科インド哲学仏教学専修非常勤講師
 二〇〇四年四月―二〇一三年三月 東洋大学文学部インド哲学科教授（学科名変更のため）
 二〇一二年四月―二〇一四年三月 東洋大学附置東洋学研究所第一八代所長
 二〇一三年四月―現在 東洋大学文学部東洋思想文化学科教授（インド哲学科と中国哲学文学科の統合再編のため）
 二〇一六年四月―二〇一九年三月 東洋大学大学院文学研究科インド哲学仏教学専攻長
 二〇二〇年四月―二〇二二年三月 東京大学文学部人文学科言語学専修非常勤講師

学会・社会活動

一九七八年三月―二〇一二年六月

真言宗豊山派薬王山金蔵院住職

- 一九七八年四月―現在 日本印度学仏教学会会員
- 一九七八年四月―現在 真言宗豊山派教学振興会会員
- 一九八八年一〇月―現在 日本南アジア学会会員
- 一九九〇年七月―現在 日本宗教学会会員
- 一九九三年四月―現在 日本仏教学会会員
- 一九九七年四月―一九九八年三月 日本南アジア学会紀要編集委員
- 二〇〇〇年四月―二〇〇一年三月 日本南アジア学会紀要編集委員
- 二〇〇一年四月―二〇〇六年三月 日本印度学仏教学会評議員
- 二〇〇三年四月―二〇〇五年三月 日本南アジア学会紀要編集委員
- 二〇〇四年四月―二〇〇七年三月 財団法人大法輪石原育英会選考委員
- 二〇〇七年四月―二〇二三年三月 日本印度学仏教学会理事
- 二〇〇七年四月―現在 一般財団法人大法輪石原育英会評議員
- 二〇一二年六月―現在 真言宗豊山派流東山龍樹寺住職

褒章

一九九一年一〇月

豊山教学振興会賞（教相部門）受賞

I 著書

1. 『インド・大地の讃歌―中世民衆文化とヒンディー文学』（坂田貞二・宮元啓一と共訳著、主に第二・四・六・七章担当）一九九二年、春秋社（原著 Dvivedī, Hazārīprasād, *Hindī Śāhitya ki Bhaṅgikā*, Dillī: Rājakanala Prakāśana, 1959 (First ed. 1940) 全三〇六頁。（トヨタ財団「隣人をよく知ろう」プログラム助成対象）
2. 『ぼくの庭にマンゴーは実るか』（きぬのみちえ訳・橋本泰元監訳）一九九九年、段々社（原著 Bhandārī, Mannū, *Apā ka Baṅgī, Nai Dillī: Rādhakṛṣṇa*, 1979）全三二四頁。（トヨタ財団「隣人をよく知ろう」プログラム助成対象）
3. 『宗教詩ビージャク―インド中世民衆思想の精髓』（単訳著）二〇〇二年、平凡社（「東洋文庫」703）（テキスト Gangāśaraṇa Śāstrī sampādana; Śukadeva Simha pāṭhānusandhāna, 1982, *Byjaka (Kabira Caurā pāṭha)*, Vārāṇasi: Kabīravānī Prakāśana Kendra ○ Ramainī, Sabada, Sakī部分の本文批評・和訳・訳注）全四〇八頁。（トヨタ財団「隣人をよく知ろう」プログラム助成対象）
4. 『ヒンドゥー教の事典』（宮本久義・山下博司と共著）二〇〇五年、東京堂出版、全四一四頁。
5. 『インド中世民衆思想の研究』（博士学位論文）二〇〇六年、ノンブル社、全五八二頁。（科学研究費補助金・研究成果公開促進費 課題番号175007交付対象）

II 論文・訳著

1. 「サント文学の社会的遺産」（原著 G. B. サルダール、マラーティー語）『マハーラーシュトラ―マハーラーシュトラの宗教と社会』一号、一九七八年 pp.1-32。（石田英明と共訳、第四章および訳注担当）
2. 「ガオ・ガーダー（村の機構）」（原著 M. Z. アートレー、マラーティー語）『マハーラーシュトラ―マハーラーシュトラの農村社会』二号、一九七九年 pp.1-13.
3. 「カビールの『語録全集』と聖典『ビージャク』」『印度學佛教學研究』六三三号三三卷一号、一九八三年 pp.487-499.

4. 「弘法大師の『声字』観とインドの言語哲学」『豊山学報』弘法大師一一五〇年御遠忌記念号、一九八四年pp.109-123.
5. 「カピール研究—聖典『बीज्याク』の *Ramaini* を中心として」『アジア・アフリカ語学院紀要』五号、一九八五年pp.3-19.
6. 「伝記に見られるチャイタニヤ (Caitanya 1486-1533) の思想」『印度學佛教學研究』七四号三七卷二号、一九八九年pp.938-942.
7. 「中世インドにおける宗教家の旅と思想形成(移動する人々の眼・移動する人々を見る眼)」(坂田貞二と共著)『歴史学研究』五八二号、一九八八年pp.33-49, 61.
8. 「伝記に見られるチャイタニヤ (Caitanya 1486-1533) の思想」『印度學佛教學研究』七四号三七卷二号、一九八九年pp.938-942.
9. 「ヒンディー近代散文文学の胎動」臼田雅之・押川文子・小谷汪之編『もっと知りたいインドⅡ』弘文堂、一九八九年pp.293-295.
10. 「地上の天界を歩く人々—北インドにおけるクリシュナ信仰と集団巡礼」(坂田貞二他二名と共著、第二章「チャイタニヤの教義と巡礼」を担当)『アジア・アフリカ言語文化研究』第三七号号、一九八九年pp.69-122.
11. 「〈解説と翻訳〉一六世紀北インドの巡礼案内書に見られるブラジュ地方の聖地」(坂田貞二と共著)『拓殖大学研究年報』一六号、一九八九年pp.179-212.
12. 「ラースリーラー:『クリシュナの愛の遊戯』をめぐる」『コッラニ』一三三号、一九八九年pp.36-63.
13. 「カピールの『बीज्याク』における詩的特徴」『印度學佛教學研究』七八号三九卷二号、一九九一年pp.945-949.
14. 「中世北インドのバクティ文学とサント(聖者)」『豊山学大会紀要』二〇号、一九九二年pp.111-125.
15. 「チャイタニヤの宗教と『名号』論」東洋大学東洋学研究所編『アジアにおける宗教と文化』一九九四年pp.519-539.
16. 「カピールの原典に見るカースト批判」山崎元一・佐藤正哲編『歴史・思想・構造』(叢書カースト制度と被差別民 1)、明石書店、一九九四年pp.245-282.
17. 「カピールの伝記とその意味」『東洋学論叢』二〇号、一九九五年pp.89-109.
18. 「カピールのドーハー(二行詩)—その歴史と教説」『東洋学論叢』二二二号、一九九六年pp.88-105.
19. 「カピールの言語観と生死観」『東洋学論叢』二二二号、一九九七年pp.147-165.
20. 「ヒンドゥー教における家庭」『平和と宗教』一六号、一九九七年pp.33-43(R)

21. 「インド宗教伝統にみるシャクティの概念」『豊山学報』四〇号、一九九七年pp. 47-67(L).
22. 「中世ヒンドゥー教における『共生』の原理」『仏教を中心とした「共生」の原理の総合的研究』（研究報告書）研究代表者：菅沼晃、一九九九年pp.23-54.
23. 「中世北インド民衆思想とカビール」『東洋学論叢』二四号、一九九九年、pp.56-92.
24. 「中世北インドのバクティ思想と女性詩人ミラーン・バーイー」『東洋学論叢』二五号、二〇〇〇年pp.53-81.
25. 「ヒンドゥー教における葬儀と靈魂観（上）―最期の供犠―」田中純男編『死後の世界―インド・中国・日本の冥界信仰』東洋書林、二〇〇〇年pp.38-75.
26. 「ヒンドゥー教における葬儀と靈魂観（下）―祖靈祭の構造―」『斎藤昭俊教授古稀記念論集』二〇〇〇年、こびあん書房pp.735-754.
27. 「興教大師覺鑊の身体論と生死観」『日本における死生観の研究』（研究報告書）研究代表者：高木功夫、二〇〇〇年pp.29-36(R).
28. 「カビール『ピージャク』和訳余滴―智慧の三四』『東洋学論叢』二六号、二〇〇三年pp.166-172.
29. 「ヒンドゥー教における暴力・非暴力―アヒンサー（不殺生）の觀念をめぐる』『平和と宗教』二二号、二〇〇三年pp.33-50.
30. 「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』―抄訳―」『東洋思想における心身観：東洋学研究別冊』二〇〇三年pp. 65-100(L).
31. 「カビール『ピージャク』和訳余滴：ブラーフマン（バラモン）の知性の三〇詩節」『東洋学論叢』二九号、二〇〇四年pp.100-105.
32. 「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』―抄訳二―」『東洋学研究』四一号、二〇〇四年pp. 145-169(L).
33. 「カビール『ピージャク』和訳余滴：カハラ』『東洋学論叢』三〇号、二〇〇五年pp.78-97.
34. 「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』―抄訳三―」『東洋学研究』四二号、二〇〇五年pp.279-308.
35. 「カビール『ピージャク』和訳余滴：ワサント』『東洋学論叢』三一号、二〇〇六年pp.151-164.
36. 「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャッド』―抄訳四―」『東洋学研究』四三号、二〇〇六年pp.343-360.
37. 「『ゴークラクナート語録』研究―序』『東洋学論叢』三二号、二〇〇七年pp.159-177.
38. 「ヒンドゥー教における共生思想―環境保護運動とヒンドゥー教の言説』『共生思想研究年報2006』二〇〇七年pp.101-106.

39. 『ゴラクナート語録』研究―「サブディー」(42-100)の本文と和訳』『東洋学論叢』三三三号、二〇〇八年pp.132-147.
40. 「ヒンドゥー教とイスラーム教の共生―〈境界性〉という視座から」『東洋的知に基づく〈共生〉思想の研究』(研究成果報告書)研究代
表者：竹村牧男、二〇〇八年pp.65-73.
41. 『ゴラクナート語録』研究―「サブディー」(101-150)の本文と和訳』『東洋学論叢』三四号、二〇〇九年pp.106-119.
42. 「ヒンドゥー教とイスラーム教の聖所の交渉と宗教的アイデンティティー両者の「共生」の視点から―」(原著Sunthar Visuvalingam
and Elizabeth Chalier-Visuvalingam, *Bhairava in Banaras: Negotiating Sacred Space and Religious Identity*, ed. by Martin Gaenzle and Jörg
Gengenagel, *Visualizing Space in Banaras: Images, Maps, and Practice of Representation*, Harrassowitz Verlag: Wiesbaden, 2006) 『共生思想研究年報
2008』二〇〇九年pp.83-98.
43. 『ゴラクナート語録』研究―「サブディー」(151-276)の本文と和訳』『東洋学論叢』三五号、二〇一〇年pp.148-176.
44. 「ヒンドゥー教とイスラーム教の聖所の交渉と宗教的アイデンティティー両者の「共生」の視点から―後編」(原著Sunthar Visuvalingam
and Elizabeth Chalier-Visuvalingam, *Bhairava in Banaras: Negotiating Sacred Space and Religious Identity*, ed. by Martin Gaenzle and Jörg
Gengenagel, *Visualizing Space in Banaras: Images, Maps, and Practice of Representation*, Harrassowitz Verlag: Wiesbaden, 2006) 『共生思想研究年報
2008』二〇一〇年pp.93-106.
45. 「中世ヒンドゥー教にみる『地上の天界』説と環境倫理」『エロ・フィロンソイ研究』四号、二〇一〇年pp.25-34.
46. A Study of an Aspect of Kabir's Bhakti with the Text and Translation of the Gyāna Caumhṣā in the *Bīṭak* (2011), Shima, Iwao, Teji Sakata, Katsuyuki
Iida eds. *The Historical Development of the Bhakti Movement in India*, New Delhi: Manohar, pp.213-222.
47. Shikoku Pilgrimage 'Henro', Japan (2011), with Rana P.B. Singh, 『南アジア・アフエアーズ』七卷(岐阜女子大学南アジア研究センター研究
紀要) pp.26-67.
48. 『ゴラクナート語録』研究―「パド・ラーク・ラーマグリー」(1-10)の本文と和訳』『東洋学論叢』三六号、二〇一一年pp.165-178.
49. 『ゴラクナート語録』研究―「パド・ラーク・ラーマグリー」(11-32)の本文と和訳』『東洋学論叢』三七号、二〇一二年pp.129-154.
50. Kabir's dohā: Its Role in the Religious and Poetic History of Medieval Northern India, Hiroko Nagasaki ed., *Indian and Persian Prosody and Recitation*

(with CD), New Delhi: Saijanya: 2012. pp.162-172.

- 51 「スィク(Sikh)教研究―序」『東洋学論叢』三八号、二〇一三年pp.117-136.
- 52 「スィク教聖典編纂者グル＝アルジャンの生涯―歴史と伝統のなかで―」『東洋思想文化』一号、二〇一四年pp.86-103.
- 53 「スィク教祖ナーナクの神観念」『東洋思想文化』二号、二〇一五年pp.20-43.
- 54 「異宗教間の〈境界〉と〈共生〉―インドのヒンドゥー教とイスラームについて―」宮本久義、堀内俊郎編『宗教の壁を乗り越える―多文化共生社会への思想的基盤』二〇一六年pp.145-161.
- 55 「グルー＝ナーナクの実践論―修行階梯説について―」『東洋学研究』五七号、二〇二二年、pp.75-81(L).
- 56 「スィク教聖典におけるスーフィー詩人ファリード―異宗教間の対話」『東洋学研究』五八号、二〇二二年pp.57-79.
- 57 「チャイタニヤのバクティ思想の背景―南インドのバクティ運動との関連において―」『東洋学研究』五九号、二〇二二年pp.119-142.
- 58 Shikoku Pilgrimage 'henro', Japan: Interfacing Culture-Nature, Heritage, and Landscape Architecture (2023), with Rana P.B. Singh, *Esempi di Architettura. International Journal of Architecture and Engineering*. 10-1. pp.88-115.

Ⅲ 辞典・事典の項目など

1. 「カビール」『増補改訂新潮世界文学辞典』新潮社、一九九〇年
2. 「菜食主義」「サント」「嗜好品」「肉」「バーン」『南アジアを知る事典』平凡社、一九九二年
3. 「チャンデーラ朝のヒンドゥー寺院」「聖者カビール没す ヒンドゥーとイスラームの融合を説きつづけた生涯」「既成宗教を統合したシク教の開祖ナーナクが死去」「花開くムガル細密画」「ムガル皇帝アウラングゼーブ アフガン族の制圧にようやく成功」「シク教の教主ゴーヴィンド・シング暗殺遺言により教主職廃止」「英国が西インドのシンド地方を併合 シンド軍の反乱を武力で制圧する」「インドのパンジャープで第一次シク戦始まる シク王国、イギリスに対抗」「サタジット・レイの『大地のうた』完成」樺山紘一(他)編『ケロニック世界全史』講談社、一九九四年
4. 「ナーナク―ヒンドゥー教・イスラーム教の統合者」佐藤次高編『人物世界史 東洋編』山川出版、一九九五年

5. 「カビール」「ケーシヤヴダース」「ジャーエスイー、マリク・ムハンマド」「スールダース」「チャウパーイー」「チャップパエ」「チャンド・バルダーイー」「デーヴ」「トゥルスイーダース」「ドーハー」「バクティ文学」「ビハーリーラール」「ミラーン・バーイー」「リーティ文学」『集英社世界文学大事典集英社、二〇〇二年
6. 「北インドのバクティ運動」井上順孝編『世界宗教百科事典』丸善出版、二〇一二年

IV その他

1. 「『インド』の国名と由来」『月刊シルクロード』二巻七号、一九八三年八月号pp.4.
2. 「わが師V.P.ミシユラ先生の思い出―中期ヒンディー文学の伝統『月刊シルクロード』二巻一〇号、一九八三年十二月号pp.3-4.
3. 「北インドの伝統絵画『サーンジ』」『月刊シルクロード』四巻二号、一九八五年三月号pp.4-6.
4. 「黄昏のバナラース―ヒンドゥー教の聖地に暮らして」『エネルギーレビュー』8』一九八五年pp.34-39.
5. 「北インドの宗教と文学」J.S.ホウリー氏を迎えて』『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』五六号、一九八六年pp.32-34.
6. 「背中合わせの聖地―バナラース」坂田貞二編『都市の顔・インドの旅』春秋社、一九九一年
7. 「南アジア・中世（一九九三年の歴史学界：回顧と展望）」『史學雑誌』一〇四巻五号、一九九四年pp.916-919.
8. 「ヒンドゥー教における家庭」『平和と宗教』一六号、一九九七年pp.33-43.
9. 「ヴェニスとヒンディー語」（ヒンディー語原文・和訳付）*KOZUMOS Tokyo University Library Information Bulletin* 巻頭エッセイ、一九九八年
10. 「解説」クシュティ・モーハン・セーン著／中川正生訳『ヒンドゥー教』講談社現代新書、一九九九年pp.197-215.
11. 「南アジア・中世（一九九九年の歴史学界：回顧と展望）」『史學雑誌』一〇九巻五号、二〇〇〇年pp.935-939.
12. *Researches on Early Literature in New Indo-Aryan Languages in Japan after 1980*, Offredi, Mariola (ed.) *The Banyan Tree: Essays on Early Literature in New Indo-Aryan Languages* Vol.2, New Delhi: Manohar, 2000, pp. 585-588.
13. 「東洋文庫を読む（番外篇）インド民のこぼれ―宗教詩ビージャクアーインド中世民衆思想の精髓」『月刊百科』四七九号（平凡社）

- 14 Medieval Hindi Literature in Japan: Special Reference to Translating Kabir's Bījak, Sachidanand, Unita and Teiji Sakata eds. *Imaging India*
Imaging India: A Chronicle of Reflections on Mutual Literature, Delhi: Manak, 2004, pp.287-292.
- 15 「インド 民のことば」『東洋文庫ガイドブック2』（平凡社東洋文庫編集部編）二〇〇六年pp.238-242.
- 16 「「コラム7」インドで美酒を楽しむ」宮本久義・小西広大編『インドを旅する55章』明石書店、二〇二一年pp.234-237.
- 17 「ちりめん本コレクション」『みてーみてー！長〜い眠りから目覚めたお宝たち』（東洋大学図書館広報誌）二〇二二年
- 18 「ヒンドゥー教の死生観」監修・協力、『ソナエ』二〇二二年春号、産経新聞
- 19 **भारत, हिन्दी और मेरी ज़िंदगी, पांडेय, श्यामुंदर व हिंदीआकी इशिता संपादित, जापान में हिन्दी के पहलू, मुम्बई: आर. के. पब्लिकेशन. 2023, पृष्ठ 123-132.**